「木曾の最期」

作・田坂哲郎

木曽冠者義仲（源義仲）
今井四郎兼平
巴丸
石田為久

正月二十日。粟津の松原。現在の滋賀県大津市。琵琶湖の南端あたり。
義仲、兼平、巴丸の三人が、息も絶え絶えにやってくる。
馬もなく、武器もなく、鎧も逃げる途中で脱ぎ捨ててしまった。
一足先を歩いていた巴丸が立ち止まる。
義仲の状態を案じている。

巴丸　ここで。
兼平　ああ。
義仲　いやまだ……
巴丸　ここで。

兼平と巴丸、義仲を座らせる。

巴丸　おかげんは。
義仲　だいぶ。

沈黙。

義仲　すまん。

兼平　拾ってきます、鎧。[1]

義仲　いや、もういい

兼平　すぐなんで。

義仲　休んどけ。

兼平　大丈夫です。

義仲　もう三人なんだ。

間。

義仲　もう三人なんだよ。

巴丸　結局、この三人ですねえ。

義仲　あ？

巴丸　我々は。

兼平　そうだな。

義仲　そうか。

巴丸　とっくに盗られてますよ。

---

[1] 平家物語には、義仲が兼平に「いつもは何ともない鎧がきょうは重く感じる」とこぼしたというエピソードがあり、そこから、すでに鎧を脱ぎ捨てている、という設定を着想しました。

兼平　あ？
巴丸　鎧。
義仲　値打ちものだからな。
巴丸　ええ。
義仲　しかし、あの木曾義仲の鎧とは誰も思わんだろうな。
兼平　七尺[2]を越えるらしいですよ。
義仲　だれが。
兼平　「木曽義仲」です。
義仲　そんなに？
兼平　はい。
義仲　だれと間違えたんだ。
兼平　私もそんなにないですよ。
巴丸　私もないです。
義仲　七尺って、どんくらいだ
巴丸　義仲さまが、義仲さまを肩車して、さらに、義仲さまを肩車したくらいです
義仲　ピンと来ないな。
巴丸　ざっくり倍ですよ。

[2] 約２ｍ１２㎝。

義仲　倍ってことはないよ、俺だって四尺と二寸はあるよ。
巴丸　ええ？
義仲　四尺二寸はあるよ。
巴丸　ざっくり倍じゃないですか。
義仲　倍じゃないよ。
巴丸　ええ？
義仲　四尺二寸あるんだから、倍だったら八尺超えるよ
巴丸　七尺も八尺も同じようなもんですよ
義仲　ええ？
巴丸　どっちにしろ大きいんですから。
義仲　どう思う？
兼平　え？
義仲　どう思うよ。
兼平　なんかそのくらいのを作っとけばよかったですね。
義仲　あ？
兼平　七尺だか八尺だかの、鎧を。
義仲　なんで。
兼平　いや、だから、「義仲」の鎧ですってことにして。
巴丸　ああ。

義仲　え？　どゆこと？
兼平　だから、義仲の鎧だってことになれば、ああやっぱ大きかったんだなって言う
巴丸　そういう風に伝わるってことですよ。
義仲　え、つけるってこと？
兼平　いや、つけるのは無理じゃないですか。
義仲　ぶかぶかになっちゃう
兼平　だから、普段は置いといて、いざと言うときにあれするんですよ。
義仲　うん？
巴丸　逃げるときに捨てておけば、おお、これが「義仲の鎧」に違いないって。
義仲　だまされるってこと？
巴丸　はい。
義仲　ああ。
兼平　後々の世まで残ります。
義仲　でもそれ、逃げる前提だしなあ。

沈黙。

義仲　巴丸。
巴丸　はい。

義仲　餅をどう食べる。
巴丸　餅？
義仲　餅だ。
巴丸　はあー、そうですね。
義仲　四郎は。
兼平　小豆の煮たやつと絡めて。
義仲　うん。
巴丸　大根を、粗めにこう、卸してですね、で、しょうゆをちっと垂らして、そこにこう、つきたてをどっと。
義仲　つきたてで考えてるのか。
巴丸　え？　はい。
兼平　違うんですか。
義仲　鏡開きで割った餅をな、囲炉裏に放り込むんだ。しばらくすると、カチカチだった餅が、ふわあっと中から膨らんでくる。それを、同じく囲炉裏にかけた鍋の中で煮えている平茸の汁の中にそっと入れてやると、じゅうっといい音をさせて、餅が汁の中に沈んでいく。汁を吸って、せんべい汁みたいになったところを椀によそって、じゅるじゅるっといきたい。
兼平　いいですねえ。
義仲　餅を食べんまま、正月がもう終わろうとしている。
兼平　切ないですねえ。
巴丸　ときに義仲さま、平茸はやっぱり、無塩（ぶえん）ですか。

兼平　おい。
義仲　いやいや平茸は、やっぱり無塩に限るな。

三人、静かにニヤニヤする。

義仲　なにが無塩[3]だくだらない。
巴丸　くだらない。あー、くだらない。
義仲　あのときすぐに張り倒しておけばよかった。
巴丸　ですねえ。
義仲　なんのために、堪忍袋を繕ったんだか
兼平　私はご立派だったと思いますよ。
義仲　なんか暑いな。雪でも食うか。
兼平　お腹壊しますよ。
義仲　持ってきてくれ。
巴丸　はい。

---

[3] 新鮮な魚を「無塩」と呼ぶことを知らずに、新しいものをそう呼ぶと勘違いし「無塩の平茸」と義仲が言って貴族たちに笑われた、というエピソードが「平家物語」にあります。無学だとバカにされたわけです。

巴丸、両手に雪をすくって義仲に差し出す。

巴丸　無塩の雪でございます。

義仲　（にやにやしながら）もういい。

義仲、雪をひとつまみとり、口に運ぶ。

義仲　うまい。

巴丸　そうですか。

義仲　お前らは寒そうだな。

兼平　汗が冷えてまいりました。

義仲　俺だけ汗だくじゃないか。

兼平　おかげんは。

義仲　あつい。

兼平　ああ。

義仲　汗が止まらんのよ。

義仲、雪を顔に塗りたくる。

巴丸　お背中に入れましょうか。
兼平　おい。
義仲　やってくれ。
兼平　冷えますよ。
義仲　暑いんだよ。
巴丸　行きますよ。

義仲、さすがの冷たさに身もだえる。

巴丸　大丈夫ですか。
義仲　大丈夫だ。
巴丸　おかわりいかがですか。
義仲　頼む。

義仲、再び身もだえる。

兼平　何をやってるんですか。
義仲　だいぶいい。
兼平　朝日の将軍とまで呼ばれたお方が。

義仲　そう怒るな。
兼平　怒ってませんよ。
義仲　汗かくぞ。
兼平　寒いんでちょうどいいです。
義仲　（巴丸に）ありがとう。
兼平　巴丸も巴丸だ。
巴丸　私？
兼平　雪を食わせるなんて。
巴丸　それは義仲さまが、
兼平　せめて毒見をしろ。
巴丸　雪だぞ。
兼平　雪でも。
巴丸　降ってきたばかりだ。新鮮なんだ。無塩だ。
兼平　当たり前だ。雪に塩なんか振ったら、解けちまうだろ。
巴丸　そうなの？
兼平　え。……知らない？
巴丸　知らないよ。そんな、雪についての豆知識。
義仲　巴丸の生国には、雪は降らんのか。
巴丸　いやまあ、木曽ほどは。

兼平　なるほど。

間。

巴丸　雪の上に塩を撒くんですか。
義仲　いや、降る前に撒いておく。
巴丸　へえ。
兼平　そうすると、積もらない。
義仲　まあ、あんまり寒いと意味ないけど。
巴丸　へえ？
義仲　解ける前に積もっちゃうから。
巴丸　塩が雪を解かすんですか。
義仲　そうだ。
巴丸　どちらも白い粒なのに。
義仲　姿かたちが似てるから、味方とは限らない。
巴丸　どちらも白い旗[4]なのに。
義仲　そうだねえ。

---

[4] 義仲も頼朝も同じ源氏であり白旗。

兼平　（思わず一緒に）そうだねえ。
義仲　ねえ。
兼平　そうですねえ。
巴丸　そうですよねえ。
三人　ねえ。

沈黙。

義仲　私には結局、木曽の山猿が似合いだったのだ。

間。

義仲　いや、自分をおとしめて言ってるんじゃなくてね。
兼平　はい。
義仲　うん。
兼平　都には、本当の空はございませんでした[5]な。
義仲　うん。まあ。そういうことでもないんだけど。

[5] 智恵子抄のパロディです。

兼平　ああ。
義仲　都にな。都に望みをな。
兼平　はい。
義仲　都に望みを、かけすぎていたのかも、
兼平　はい。
義仲　な。なんかな。
巴丸　まあでも、都ですからね。都には、なんかありそうですからね。[6]
兼平　なんかってなんだ。
巴丸　なんですかねえ。
兼平　なんだよ。
巴丸　いや、なんでしょうわかんないですけど、
兼平　うん。
巴丸　正しさ、みたいな、なんか……
義仲　風下はどっちだ。
兼平　あちらです。
義仲　ここにいろ。

---

[6] みんな、なぜだか東京を目指すよね……。

義仲、風下へ去る。
トイレに行ったのである。

兼平　雪なんか食べさせるからだ。
巴丸　食べたいって。
兼平　そこをおとどめするのが我々の役目だろう。
巴丸　清盛公の死に方を知ってるか。
兼平　あ？
巴丸　清盛だよ。平清盛[7]。
兼平　たしか……ものすごい熱で、
巴丸　地獄の炎に焼かれて死んだんだ。清盛公は。
兼平　ほう。
巴丸　身体がまるで焼け石のように熱かったらしい。
兼平　うへえ。
巴丸　水をかけたら蒸発したそうだ。
兼平　それはさすがに。

---

7 武士としてはじめて公卿の地位までのぼりつめた平家の総大将。熱病に苦しみながら「頼朝の首を俺の墓に供えろ」と言い残して死んだらしい。

巴丸　ウソかもしれんが、そう聞いた。
兼平　まあ、お似合いの最期だ。
巴丸　そう思うか。
兼平　寺まで焼いたんだ。報いは受けるさ。
巴丸　私は、義仲さまが暑いと言うたびにドキリとする。

間。

兼平　いや、
巴丸　あれは病の汗だ。
兼平　病で死ぬようなお方じゃない。
巴丸　鎧を脱ぐようなお方だったか。
兼平　うん。
巴丸　こんなイクサ場で。
兼平　地獄に落ちるか。
巴丸　落ちるさ。
兼平　うん。
巴丸　お前だって。
兼平　お前だってな。

巴丸　だれだって落ちるさ。それはしゃーない。
兼平　でも、しかし、死に方くらいは。
巴丸　ああ。
兼平　こんな、中途半端な場所で。
巴丸　そうだなあ。
兼平　朝日の将軍とまで呼ばれたお方が。
巴丸　兼平、お前、それ気に入ってるよねえ。
兼平　え？
巴丸　その、朝日の将軍。
兼平　だって名誉だろ。
巴丸　まあ名誉だけどさ。
兼平　後白河院[8]からいただいたんだぜ。
巴丸　まあね。
兼平　なんだ。
巴丸　義仲さまは、あんまり気にいってないんじゃないかなあ。

---

[8] 第七十七代の天皇。子の二条天皇に天皇の座をゆずった後も、３４年に渡り裏で政権を握った。平家が嫌になったら義仲に追い出させ、義仲が嫌になったら頼朝に討たせ、頼朝が嫌になったら……という感じだったので、日本一の大天狗と非難された。

兼平　ええ？
巴丸　うん。
兼平　それは、義仲さまが、そう？
巴丸　いや、じかにそう聞いたわけじゃないけど、
兼平　うん。
巴丸　なんとなく。うん。
兼平　またお前はこう……曖昧だな。
巴丸　おう。
兼平　模糊だな。
巴丸　まあいいじゃないの。
兼平　朝日の将軍のなにが駄目なんだ。
巴丸　いやまあわかんないけど、
兼平　うん。
巴丸　だって朝日だぜ。
兼平　いいじゃないか。
巴丸　じゃあ聞くが、なんで朝日なんだ。
兼平　そりゃあ、これから勢いよく昇っていきますよって言う、あれだろう。
巴丸　その、のぼるだ。
兼平　あ？

巴丸　朝日は東から昇ってくるよな。
兼平　そうだ。
巴丸　都から見て木曾はどっちだ。
兼平　あっちだ。
巴丸　あっちはどっちだ。
兼平　あ？　ああ、東だ、東。
巴丸　そういうことだろ。
兼平　ん？
巴丸　あ？
兼平　ん？
巴丸　つまり我々は、東から都へ上ってきた、おのぼりさんってことだよ。
兼平　……そういうことなのか？
巴丸　いやま、そういう風にもな。
兼平　めちゃくちゃバカにされてるじゃないか。
巴丸　そうともとれますって話。
兼平　後白河院！
巴丸　まあまあ。
兼平　あのハゲ。
巴丸　ハゲじゃない。坊主だ。丸めてるんだ。

兼平　丸めるって、なんか変じゃない？　なに、丸めるって。頭はそもそも丸いんですけど？
巴丸　おう。
兼平　それとも？　後白河院の頭は最初は、四角かったんですかね？
巴丸　ものの言い方だよ。
兼平　その言い方が変だって話をしてるんですけど？
巴丸　言葉に八つ当たりするな。
兼平　八つ当たりってなに？　変な言葉！
巴丸　もう。

間。

兼平　義仲さまは、木曽の山猿などではない。
巴丸　ああ。
兼平　山猿って言うほど大きくないし。
巴丸　うん。
兼平　粗暴でもない。
巴丸　ああ。
兼平　頭もいい。
巴丸　ああ。

兼平　都の人たちは、本当の義仲さまを知らない。
巴丸　うん。
兼平　のちの世にも伝わらない。
巴丸　のちの世。
兼平　そうだ。
巴丸　のちの世のことなど。
兼平　なにものだ。

義仲と石田為久、現れる。

為久　やあやあ我こそは、
兼平　名乗りは良い。
為久　……石田次郎、為久と申す。
兼平　三浦党[9]か。追ってきたのか。
為久　その顔に見覚えがある。今井四郎兼平だろう。
兼平　どうかな。

---

[9] 坂東八平氏の一つ、三浦氏一族のこと。相模国の「みうら」の地を本拠地としていたらしい。なんで三浦一族なのに石田なのかは、まあいろいろあったんでしょう。なお石田為久の子孫に石田三成がいるらしい。

為久　単刀直入にお聞きしたい。義仲はどこだ。

間。

為久　先程、そこの松原にしゃがみこんでいたこいつを捕まえた。義仲の残党と思い誰何したところ、自らが義仲であるとこう答えた。私は義仲の顔を知らない。が、こいつが義仲でないことは分かる。仲間のところに案内させたら、お前がいた。

兼平　ふうん。

為平　見たところ、イクサの出来る体ではなさそうだ。私は人殺しがしたいわけではない。手柄が欲しいだけだ。義仲の首を差し出せば、お前たちは見逃してもいい。

義仲　私が義仲だ。

為平　忠義に厚いのは立派だが、影武者をやるには少し、背丈が足りないのではないか？

義仲　なんとか言ってやってくれ。

巴丸　私が義仲だ。

為久　お前はだれだ。

巴丸　……義仲。

為久　違う。

巴丸　じゃあ誰だと思う。

間。

為久　なるほど。なるほどな。
巴丸　なんだ。
為久　家臣がこぞって身代わりになろうとしてるというのに、当の本人はどこかで高みの見物か。
兼平　義仲さまは、（そのようなお方ではない）
為久　お前たちはそれでいいのか？
兼平　なに？
為久　勝負はすでについている。ここは堂々と大将が名乗り出て、家臣たちを守るのが筋じゃあないのか。
義仲　だからそうしてるじゃないか。
為久　しつこいぞ。
義仲　あのなあ、
為久　朝日の将軍とまで呼ばれた男が、負け戦とはいえ、鎧を脱ぎ捨てるものか。

沈黙。

為久　そうだろう。鎧は、もののふの誇りだ。
義仲　誇りだなんてそんな大げさな。
為久　あ？

義仲　そんな大したものじゃないだろう、鎧なんて。
為久　なんだと。
義仲　鎧と言うのはな、怖いからつけるのだ。
為久　あ？
義仲　切られるのが怖い、刺されるのが怖い。ひいては死ぬのが怖い。だから守るのだ。鎧と言うのは、栗のイガと同じだ。
為久　それは詭弁だ。
義仲　詭弁なもんか。
為久　攻めと守りはイクサの基本だ。
義仲　鹿だって戦っているが裸一貫だ。
為久　鹿には角がある。
義仲　人間には知恵がある。
為久　その知恵で、鎧を作り出したのではないのか。

間。

義仲　石田為久と言ったな。
為久　そうだ。
義仲　なかなか、やるじゃないか。

為久　あ？
義仲　二人とも申し訳ない。
巴丸　あ、いや。
義仲　この風体を正当化しようと思ったが無理だった。
巴丸　突然何を言い出したのかと。
義仲　恥ずかしいじゃないか。鎧も着てないのに、捕まっちゃって。なあ。
兼平　あ、ええと、
義仲　せめて鎧を捨てずにおけば、義仲だと証明できたのに。
兼平　今からでも拾ってまいります。
義仲　もうとっくに盗られてるよ。糸目をつけずにあつらえたんだ。
兼平　しかし鎧はもののふの誇りです。
義仲　それが重くて脱ぎ捨てたんだ。言わせるな。
兼平　はい。
義仲　為久とやら。聞いた話とだいぶ違うんだろうが、私が、源義仲だ。先程の言葉に嘘がないなら、私の首を取って、二人は逃がしてやってくれ。

沈黙。

為久　本当、なのか。

義仲　義仲だ。
為久　お前が。
義仲　私が。
為久　にわかには信じがたい。
義仲　うん、まあ、うん。
兼平　義仲さま、死ぬときは一緒でございます。
巴丸　兼平におなじく。
義仲　こいつが欲しいのは私の首だ。そうだな。
為久　お前が義仲なら。
義仲　まだ信じてもらえないか。
為久　違ってみろ、笑いものだ。
義仲　だれの首だってとらないよりはましだろう。
為久　名をあげたいのだ。
義仲　名をあげてどうしたい。
為久　のちの世に残りたい。
巴丸　のちの世か。
為久　義仲の名前は必ず残る。
兼平　当たり前だ。
義仲　木曽の山猿としてな。

為久　そうだ。だが残る。
巴丸　死んだらそれきりだ。
為久　そうではない。死後の活躍がある。
巴丸　死後の活躍。
為久　武勇伝で人を動かす。
巴丸　武勇伝ですって。
義仲　武勇伝なんかあったか。
為久　ほら、牛の頭に松明かなんか火つけて走らせた話[10]とか、聞いてるぞ。

間

巴丸　為久殿は、あの話をまことだと。
為久　え？
兼平　まことだと思っているならそれでいいじゃないか。
為久　ホラなのか。
義仲　ホラというとまるであれだな。

10　倶利伽羅峠の戦いのエピソードから。平家が寝静まった夜中にいきなり仕掛け、平維盛率いる10万の兵をほぼ全滅させたと言われている。さすがに盛ってるとも言われている。

巴丸　あれですなあ。
為久　ホラなのか。
兼平　まことだ。
巴丸　まことじゃないでしょう。
兼平　まことみたいなもんだ。
巴丸　違いますよ。
兼平　牛はいただろ。
巴丸　牛はいた。
兼平　牛はいたんだ。
為久　ん？
兼平　牛はいた。これはまことだ。
為久　松明は。
兼平　松明もあった。
為久　ん。
兼平　牛はいた。松明もあった。わたしが言えるのはそこまでだ。
為久　そうだ。巴御前は。
兼平　あ？
為久　木曽義仲の一味には、巴御前がいるだろう。それで本物だと証明できるではないか。
兼平　巴御前。

為久　そうだ。
兼平　見目麗しく、それでいて大の男を投げ飛ばすほどの力を持つイクサ場の女神か。
為久　顔も知っている。
兼平　顔？
為久　都で売っていた。

為久、ふところから一枚の紙を出し、広げて見せる。
三人、のぞき込む。

巴丸　へー。
義仲　これがねえ。
為久　巴御前だ。巴御前と書いてある。
兼平　書いてある……。
為久　兼平殿が知らないはずはない。
巴丸　大事そうにしまっちゃって。
為久　美女と山猿。いっとき都はこの話でもちきりだった。
義仲　私を描いたやつはないのか。
為久　あるとも。持ってはいない。
義仲　ああ。

為久　巴御前なら、何枚か持っている。
巴丸　見ることもなくよくここまで書けるな。
兼平　見てないから書けるんだろう。
為久　私だって、そっくりそのままとは思っていない。
巴丸　おう。
為久　こういうのは尾ひれがついて当然だ。しかし、火のない所になんとやらともいうだろう。
巴丸　なんとやらというなあ。
為久　あなたが本物の義仲、義仲殿なら、巴御前に会わせてくれ。

間。

義仲　巴御前は、先に逃がした。[11]
為久　逃がした。
義仲　そうだったな。
巴丸　はい。
為久　逃がした。

---

[11] 平家物語によれば、「最後の戦いに女を連れていたと言われるのは無念」と去るように命じられ、置き土産に一人の敵の首をねじ切って去ったという。首をねじ切るて。その後については諸説あり。

義仲　どれだけ男勝りと言っても、やはり女だ。イクサ場で死なせるわけにはいかない。
巴丸　なみだなみだの別れでございました。
為久　そうか。
義仲　だからもうここにはいない。残念だが、会わせることは出来ない。
巴丸　もうちょっと来るのが早かったらね。
為久　本当なのか。
兼平　ん？
為久　今の話。
兼平　義仲さまが、ホラを吹くとでも。
為久　そうか。逃がしたか。
巴丸　そんなに落ち込まなくても。
為久　ん？　誰が？
巴丸　逃げたということは、生きているということでもある。
為久　たしかに。
巴丸　いのちがあれば、どこかで会えるかもしれないよ、巴御前。
為久　別に、巴御前に会いたいわけではない。
巴丸　ああ？
為久　この人が、本物の木曽義仲かどうか確かめるために、必要だという話だ。
巴丸　へえ。

義仲　まだ信じてないの？
為久　せめて鎧をつけていれば。
兼平　その話を蒸し返すのはやめろ。
為久　ちなみにだが、巴御前はどちらの方向に逃げたんだ。
兼平　え、そ、そりゃあ……
巴丸　聞いてどうすんの。
為久　私は兼平殿に質問をしている。
兼平　ええ、ああ、そりゃあ、ねえ。木曽の、方というか、
為久　木曽の方なら東か。
兼平　まあ、直接ということではないが、
為久　別に追いかけるつもりはない。正直に答えてくれ。
兼平　ああ、うん。木曽だ東だ。
為久　そうか。

為久、東の方に去る。

義仲　墓まで持ってくぞ。
兼平　はい。
巴丸　はい。

為久、大声で叫ぶ。霧の晴れた顔で戻ってくる。

為久　信じよう。
義仲　ええ？
為久　らちが明かない。そちらの言う通り、誰の首でもとらないよりましだ。
義仲　そんなこと言ったか。
為久　言った。
義仲　うん。
為久　約束通り、二人は逃がしてもいい。
兼平　ちょっと待ってほしい。
為久　なんだ。
兼平　この方は木曽義仲さまだ。だからこれから為久殿がとるのは間違いなく、木曽義仲の首だ。
為久　信じようと言っている。
兼平　為久殿は、このことをどう伝えるおつもりだ。
為久　どう？
兼平　どのようにして、木曽義仲の首をとったと話すのだ。
為久　ありのままを話すつもりでいたが、
兼平　あの木曽義仲が、イクサ場で鎧を脱ぎ、草むらでクソを垂れていたところを捕まえたと。
義仲　言い方。

兼平　信じてもらえると思うのか。
為久　信じてもらうも何も、本当のことだ。
兼平　あの、木曽義仲だぞ。牛の頭に松明を燃やし、かりそめの旗で敵を惑わす[12]、知略謀略に秀でた背丈八尺の山猿だぞ。
為久　わあ……
兼平　イクサ場での経験も浅い半人前のお前がなぜ、とこうなる。
為久　半人前とはなんだ。
兼平　半人前だろう。
巴丸　初陣かもしれん。
為久　初陣ではない。
巴丸　どうだか。
為久　初陣ではない。
兼平　殺さんのがなによりの証拠だ。
為久　なに。
兼平　木曽義仲かどうかなんて、殺してからでいいのではないか。
為久　しかし、もし義仲でなかったら、

---

[12] これも倶利伽羅峠の戦いのエピソード。あるタイミングで一斉に仕込んでいたたくさんの白旗をあげ、源氏兵がめちゃくちゃいると平家軍に勘違いさせ、戦意を喪失させたらしい。

兼平　なんだ。
為久　無駄に殺すことになるだろう。

間

巴丸　無塩だなあ
義仲　無塩だわ
為久　なんだ？
巴丸　無塩過ぎて涙が出る。
義仲　真情あふるる無塩さ[13]だわ。
為久　なに、なに、なに？
義仲　為久殿は無塩の意味を御存じないか
為久　知ってるとも。知らずに恥をかいたのは義仲殿の方であろう
義仲　なんだそれも知ってるのか。
巴丸　だから無塩だと言っているのだ。
為久　ああ？
兼平　イクサ場の命に、無駄もへちまもない。

13　清水邦夫の戯曲「真情あふるる軽薄さ」のパロディ。意味は特にないです。

為久　分かった殺す。全員殺す。こういうことだな？
兼平　何もわかってないな。
為久　なんだ。
兼平　問題なのは、お前がどのように伝えるか、その一点だけだ。
為久　ああ。
兼平　義仲さまはすでに死んでいた、と伝えてほしい。
為久　ああ？
兼平　松林の奥に小さなお堂がある。そこで腹を切って死んでいたと。
為久　なぜだ。
兼平　死体の首を斬ることくらい、無塩にも出来るだろう。
為久　それでは、武勇伝にならない。
兼平　首があれば十分だろう。
為久　討ち取らなければ意味がないだろう。
兼平　討ち取れないよ。
為久　いやうち、は？
兼平　無塩なんかに義仲さまが討ち取れると思うか？
為久　馬鹿にするな。
兼平　今討ち取ってないのにいつ討ち取るんだ。
為久　じゃあ今討ち取るよ。

兼平　まだ話が終わってないだろ。
為久　……そうだな。
巴丸　為久殿が討ち取ったと言っても誰も信じないぞって話をしてるんだ。
兼平　そうだ。
巴丸　だからこれは為久殿にとっても悪い提案ではないと思うが。
為久　納得いかない。
兼平　うん。
為久　なぜ、ありのままを伝えてはだめなのだ。
兼平　ありのままのことなど、誰も信じないからだ。
為久　信じないか？
巴丸　お前だって、義仲さまだと信じなかったじゃないか。
為久　それとこれとは、
巴丸　同じことだ。
為久　いや……
巴丸　それに、お前が討ち取りたい義仲さまは、お前なんかに討ち取られる義仲さまではないだろう。

為久、長考して、

為久　え？

巴丸　お前が討ち取りたい義仲さまは、お前なんかに討ち取られる義仲さまではないだろう。
為久　えあ……
義仲　むずかしいことを言うね。
兼平　義仲さま、こいつがありのままにこだわるなら、ありのままにしてやるというのも手かもしれません。
義仲　ああ。
兼平　お堂に、参りましょうか。
義仲　そうだな。
為久　たまたま、ということならありえるのではないか。
兼平　あ？
為久　たまたま、私の射た矢が、当たったということなら、どうだ。
兼平　そんなことあるわけないだろう。
為久　だから、たまたまなんだ。私の弓の腕は関係ない。すべては星のめぐりだ。
兼平　だめだ。
為久　どうして。
兼平　義仲さまの星のめぐりが悪いわけないだろう。
為久　それは通らない。
兼平　ああ？
為久　いいときもあれば、悪いときもある。それが星のめぐりというものだ。
兼平　今から我々は、そこのお堂で義仲さまの自害を見届け、そして死ぬ。半刻もあれば終わるだろう。その

あとお前はお堂に入り、義仲さまの首を持って都に帰り、こう言ってくれ。義仲さまは、それは立派な死に姿でございましたと。

為久　んん……

兼平　ホラを吹けとは言ってない。ありのままを伝えればいい。

為久　だめだ。

兼平　どうして。

為久　都がのぞんでいるのは、そんな木曽の最期ではない。

兼平　ああ？

為久　無塩なのはお前たちの方だ。

巴丸　なんだとお。

為久　義仲が馬を下り松林の奥のお堂に向かう途中、ぬかるみにはまって動けなくなった。そこに私の放った矢が運よく義仲の眉間を射抜いた。[14]

義仲　うわあ。

為久　都で私はこういうつもりだ。

巴丸　だぼだぼにかっこわる。

兼平　それこそホラだ。

---

[14] これが、「平家物語」による木曽義仲の最期の描写です。さすがにカッコ悪すぎだろ、というのが今回の脚本を書く出発点でした。

為久　はっきり言ってやろう。都が求めているのは、都が信じたがっているのは、木曽の山猿のカッコ悪い死だ。やはり山猿、人間相手に思い上がってそら見たことかと留飲を下げたい。

兼平　今すぐお前を殺す。

義仲　だれが首を持ち帰っても同じことをするだろう。

兼平　義仲さま。

為久　その通り。

義仲　もっとひどいことを言われるかもしれない。

為久　その通り。

兼平　こいつがましとは限りません。

為久　ましだ、ましまし。

兼平　ましなもんか。

為久　キツネに化かされ裸踊りしていたと言ってやろうか。

兼平　ころす。

為久　でっかいぬか床の中でいい感じに漬かってたといってやろうか。

兼平　ころす。

為久　やいのやいの。

兼平　やいのやいの言うな。

巴丸　どうしようもない。のちの世のことなど。

兼平　そんなことはない。

巴丸　死んだらなにもできない。
為久　そんなことはない。
巴丸　なにもできないよ。
為久　死後の活躍がある。
巴丸　活躍すんのは生きてるほうだ。
為久　武勇伝で人を動かす。
巴丸　動いてんのは生きてるほうだ。
兼平　不名誉なホラが広まれば、義仲さまが死に恥をさらす。
巴丸　しにはじ
兼平　死に恥は生き恥よりつらいぞ。
巴丸　どうして。
兼平　生きてる時間より死んでる時間の方がずっと長い。
巴丸　義仲さま。
義仲　なんだ。
巴丸　こいつら二人、言い負かしてもよろしいでしょうか。
義仲　え、いいけど、なんで聞いた？
巴丸　少々、義仲さまのお心をえぐるかもしれませんが。
義仲　ほう……
巴丸　言い負かしてもよろしいでしょうか。

義仲　好きにしな。
為久　なんだやれんのか。
巴丸　為久殿はこのイクサどちらが勝つと思う。
為久　それはもちろん源氏が勝つと言いたいところだが、そうだなあ
義仲　平家に勝ちの目があるのか。
巴丸　兼平は。
兼平　義仲さまを失った源氏に勝ちの目などあるものか。
巴丸　平家が勝つと。
兼平　源氏は身内で殺しすぎる。いつか自滅する。
巴丸　なるほど。
兼平　巴丸はどっちが勝つと思うんだ。
巴丸　どっちも負ける。
兼平　はあ？
巴丸　視野を広く持て。この世に勝ちイクサなどないぞ兼平。なぜなら全員いずれ死ぬ。
兼平　それは詭弁だ。
巴丸　じゃあおまえたちに分かりやすいよう、視野をせばめてやろう。このイクサ、どちらが勝つかはまだ先の話だが、少なくとも義仲さまは負けた側だ。これは決定。
義仲　えぐるね。
巴丸　歴史はつねに勝った側がつくるんです。平家が勝とうが源氏が勝とうが、義仲さまは負けた側。のちの

世にかっこよく伝わることはありません。
兼平　巴丸、もう少しあるだろう配慮が。
巴丸　しかしご安心ください。のちの世のことなど、どうでもいい。どうせ全員いずれ死ぬんですから。
義仲　それは慰めてるのか
巴丸　つまり兼平、こいつが義仲さまの死にざまを美しく語ったところで、その通りには残らないのだから、何を言うかなど気にするな。
兼平　んん……
巴丸　ぬか漬けになったっていいじゃないか。
義仲　なってないのよ。
巴丸　なったっていいじゃないですか。
義仲　なってないもの。
巴丸　さて次はお前だ半人前。
為久　腹立つのお。
巴丸　討ち取らなければ武勇伝にはならないとかのたまっていたが、この話、どう伝えてもお前の武勇伝にはならない。
為久　なに？
巴丸　お前がどんな尾ひれをつけて話そうが勝手だが、木曽の最期という物語のキモは、朝日の将軍とまで呼

ばれた男が、名もなき、半人前の、ザコ兵士に討たれた、という部分にある。[15]

為久　腹立つのお。

巴丸　たしかにお前の存在は残るかもしれない。しかし、義仲さまの死をカッコ悪くしようとすればするほど、討ち取った兵士は非力で、なんのとりえもなく、名前を覚える価値もないような唐変木の土手カボチャとして語られなければならない。

為久　土手カボチャ[16]ってなに

巴丸　強い奴に討ち取られたら、カッコ悪くないからだ。そうだろう。

義仲　言うのお。

巴丸　言う。のお？

為久　あい、のお。

巴丸　それでも為久殿は、のちの世に名前を残したいか。まあ今から残りの人生で、木曽義仲を討ち取った以上の武功をあげることができるなら死に恥をさらすこともない。その覚悟があるのなら、どうぞうちのオン大将を、ぬかに漬けてやってくれ。

---

[15] 実際Wikipediaをみても、石田為久には木曽義仲を討った以外のエピソードがありません。また、「愚管抄」という別の文献には、義仲を討ったのは伊勢義盛である、と書かれています。名前すら、しっかりと伝わってないのです。

[16] 調べると、この時代はまだカボチャは日本にはなかったらしい。そういうこともある。

沈黙。

義仲　巴丸。お前のせいでみんな沈んじゃったよ。
巴丸　はい。
義仲　こんな葬式みたいな空気の中で死ねないよ。
巴丸　ああ。歌[17]でも歌います？
義仲　やめて。
巴丸　はい。

間。

義仲　為久殿、さきほど、平家に勝ちの目があるようなことを言っていたが。
為久　はい。
義仲　なぜそう思う。
為久　まあ、その、半人前の戯言だ。
巴丸　ごめんて。

---

[17] ここでは今様という当時の流行歌のことを指しています。後白河院は今様にドはまりしていたらしく、あえて後白河院を想起させることを言って、義仲を茶化しているのです。

義仲　聞かせてくれないか。
為久　どうしてです。
義仲　未来の話がしたい。
為久　オカの上では源氏が強いが、海の上は平家に分がある。フナイクサに持ち込むことができれば、あるいは。
義仲　なるほど。海の上なら平家が勝つか。
為久　貿易で膨らんだ一族だからな。
義仲　なるほど。
為久　それに、兼平殿の言う通り、源氏は身内で殺しすぎる。平家だって一枚岩じゃあないでしょうが、源氏よりははるかにましに見えます。
義仲　厳しいな。
為久　すみません。
義仲　いやいや、なんというか、うん、言う通りかもしれない。
為久　すみません。
義仲　平家がいなくなればこの国は変わる。結構本気でそう思っていた。
為久　ああ。
義仲　清盛公が死んだ時はもしやと思ったが、かしらが一人たおれたくらいじゃ変わらんな。
巴丸　なんかこう、影響力みたいなのがいまだにある感じしますもんね。
義仲　まさに死後の活躍だな。

為久　はあ。
義仲　それにくらべて我々ときたら。みんなが平家を疎んじているというから都から追い出してやったのに。
巴丸　今度は我々が疎んじられて。
兼平　平家の方がましだったとまで言われましたな。
義仲　あげく身内に討ち取られるとは。
巴丸　どちらも同じ旗なのに。
義仲　そうだねえ。
為久　そうだねえ。
義仲　ねえ。
為久　そうだねえ。
兼平　平家側には、ミカド[18]もいるしな。
巴丸　なんとかのツルギもあるし[19]。
為久　そう。ミカドの存在は正直大きい。ミカドと言うのは、この国の時間そのものだ。ミカドが歩いた道が過去であり、ミカドの見る景色がこの国の未来だ。
巴丸　では今この国は、西にくだってるんだな。
為久　そういうことじゃないが、まあ、そういうことかもしれない。

18　安徳天皇のこと。清盛の娘、徳子の息子でもあり、平家が西へ逃げる際に連れて行っている。
19　三種の神器のひとつ、草薙剣（くさなぎのつるぎ）。

この西は、西方浄土[20]の暗喩です。

為久　巴御前がいるではないか。

義仲　え？　どこに？

為久　いやいや、木曽に逃げたんだろ？

義仲　そうだ？

為久　お前たちには、少なくとも一人生き証人がいるってことだ。

兼平　なんの。

為久　お前たちがどんな人間だったかを伝える生き証人だ。巴御前の言葉なら人は信じるかもしれない。

兼平　ああ……

巴丸　為久殿は、まだそんなことにこだわっているのか。

為久　私が世に名を残せないことはよくわかった。今から残りの人生で、義仲を討った以上の武功などあげられるはずもない。

巴丸　ごめんて。

為久　いやいや、これはもうなんだ、仕方がないというやつだ。……実を言えば、はじめから、あなたのことは木曽義仲殿であろうと思っていた。

---

[20] あの世のこと。

義仲　ええ？
為久　いやもうほんと、申し訳ない。
義仲　え、どゆこと？
為久　そもそも私は別に、お前たちを追っていたわけではない。正直に言えば、陣営からはぐれて迷子になっていた。うろうろしていると、たまたま義仲殿がいた。
巴丸　たまたま。
為久　義仲殿だと思ったが、義仲殿だと思うと話しかけられない。そう思った。だから、義仲殿ではないと思うことにした。
義仲　ええ？　それで、あれ？
為久　数々の無礼、本当に申し訳ない。
義仲　いや、まあ……そお……
為久　こんななんでもない私と、こんなに話をしてくれて、本当にありがたいと思っている。ああ、二人も。
巴丸　おお。
為久　私が討たずとも、ここで死ぬつもりであることはわかった。首は持ち帰らせてもらう。どのように伝えるかは正直まだまとまらないが、
巴丸　首は持ち帰るんかい。
為久　脇役でもいいから、私もこの、木曽の最期に参加させてほしい。
義仲　好きにしろ。
為久　かたじけない。

巴丸　参加するってなに。
兼平　登場人物になりたいんだろう。
巴丸　ふうん。
為久　なりたい。
巴丸　ふうん。

間。

兼平　ぼちぼち、行こうか。
巴丸　そうだな。
兼平　なんか、最後の最後におもしろかったぞ。なんか。
為久　あ、はあ。
兼平　ほどほどにカッコ悪く伝えてくれ。
為久　行くのか。
兼平　うん。
巴丸　うん。
義仲　待ってくれ。
兼平　義仲さま、我々はお供します。
義仲　いや、そうではなくて……。為久殿。

為久　はい。
義仲　先ほど見せてもらった巴御前の似姿。
為久　はい。
義仲　兼平のはあるのか。
為久　（笑って）それが全然似てないんですよ。
兼平　あるのかよ。
為久　兼平殿はいまでも人気がありますよ。
巴丸　今でも。
為久　忠実な家臣っていうのは、支持得やすいんですよ。
兼平　ほう。
為久　義仲人気が落ち目なんで、その対比もあって、
兼平　それ以上言うと殺す。
為久　ええ？
兼平　殺す。
為久　ええ？
義仲　落ち目かあ。
巴丸　いいときもあったってことですよ。
義仲　美女と山猿？
巴丸　はい。

義仲　まあ私が落ち目なのはいいが、
兼平　よくないです。
義仲　兼平は人気なんだな。
為久　まあ、はい。
義仲　なら、今井兼平がカッコよく死んだら、その死はかっこよく語り継がれるか？
為久　そうでしょうね。
義仲　四郎、かっこよく死ぬぞ。
兼平　はい？
義仲　すごい死に方しよう。
兼平　な、なんです？
義仲　いや、一人くらい、かっこいい奴がいたっていいじゃないか。
兼平　私は義仲さまのお供を。
義仲　お供はお供よ。だって、死ぬんでしょ？　死ななくてもいいけど、どうせ死ぬよね。
兼平　死にますね。
義仲　だったら派手に死んでさ、そしたら為久殿がいい感じに伝えてくれるよ。なあ。
為久　ああ、まあ。そうですね。私もカッコいい方がいいと思います。
兼平　え、派手に死ぬって、なんですか。

巴丸　刀を口から飲んで死ぬとか。[21]
兼平　ええ？
巴丸　ちょうど、アユの塩焼きみたいに……（言いながら笑ってしまう）
兼平　笑ってるもん。
為久　牛の頭に松明をつけて、それに乗るってのはどうですか。
兼平　牛がいないだろ。
為久　じゃあ馬でもいいです。
兼平　馬もいないよ。
為久　いや馬はいてもおかしくないじゃないですか。
兼平　でも現にいないから、馬は。
為久　乗ってきたことにすればいいじゃないですか。
兼平　だから乗り捨ててきたの、馬は。
巴丸　兼平、ほんとにやるわけじゃないぞ。
兼平　え？
巴丸　そういう風に伝えてくれるって話。
兼平　ああ、なんだ。

---

[21]「平家物語」によれば、兼平は義仲の死を知ったのち、「これを見ろ。日本一の強者の自害の仕方だ」と言って、刀の先を口に含み、馬上から飛び降り、刀に貫かれ自害したそうです。やばすぎる。

為久　ほんとにやるんじゃないんだ。
巴丸　え？
為久　え？
巴丸　やらないよ。
義仲　やってもいいけどな。
巴丸　え？
義仲　冗談。
為久　ホラなんだったら、でっかいホラの方がいいでしょうね。
義仲　そうだな。
為久　義仲殿を失った悲しみで、神通力に目覚めて、
義仲　おう。
為久　山は轟き、大地は割れ、海は叫び、いくつかの村が滅ぶ。
兼平　何を言ってるんだお前は。
巴丸　カッコいいとか悪いとかじゃなくなってる。
為久　でも伝説って感じしません？
巴丸　そういうのはなんか、神話のあれだろ。
為久　そうだよ神話。神話最高。
義仲　為久殿は神話がお好きか。
為久　はい。武勇伝の宝庫ですからね。

巴丸　武勇伝。
為久　ヤマトタケルノミコトがクマソをやっつけるところなんかいいじゃないですか。
巴丸　どんな話だ。
為久　知らないのか。
巴丸　知らんよ。
為久　ヤマトタケルノミコトってのは、まあ大昔の、なんとか天皇の皇子でな。朝廷に従わないクマソってやつらを退治しに行くわけだ。
巴丸　大昔の天皇は自らイクサに出向いたのか。
為久　そうだ。強さこそ強さだからな。
兼平　何を言ってるんだお前は。
為久　しかしクマソは強い。そこでヤマトタケルは一計を案じた。女の格好をして忍び込み、強い酒をクマソにすすめ、酔ったところを討ち取った。
巴丸　それのどこがカッコいいんだ。
為久　カッコいいじゃないか。これこそ知略ってやつだ。
巴丸　正々堂々と戦ったら勝てなかったってことだろ。
為久　そうだが。
巴丸　カッコ悪いじゃないか。
為久　だから女の格好をして忍び込むんだ。
巴丸　卑怯じゃないか。

為久　それに気づかないクマソが間抜けなんだよ。
巴丸　それで行けると思った方もどっこいどっこいだよ。
為久　ええええー……相容れんなあ。
兼平　結局、なにをどう語っても、聴き手次第ということですな。
義仲　そうだな。うんわかった、今井兼平の死をどう語るかは、為久殿に任せる。
巴丸　いいんですか。
義仲　まあ、普通に腹を切ったと言ってもいいし、かっこいい死に方が思いつけばそれでもいい。
為久　わかりました。なんか、かっこいい奴考えます。
巴丸　決めといたほうがいいんじゃないですか。
義仲　大丈夫だろ。
巴丸　神話はなしだぞ。
為久　わかった。
兼平　馬はいたほうがいいな。
為久　わかった。
兼平　鎧もつけていたことにしてくれ。
為久　わかった。
兼平　義仲殿もだ。
為久　わかった。
義仲　私はカッコ悪くていいよ。

兼平　いえ、せめて、鎧は。
義仲　実際脱いでるし。
兼平　もののふの誇りですから。
為久　鎧はつけてたことにしましょう。
義仲　もう。好きにしろ。
為久　おぬしは。
巴丸　私はいい。
為久　しかし、
巴丸　のちの世に残るなど、まっぴらごめん。
為久　わかった。
巴丸　では、まいりましょう、義仲さま。
義仲　うん。

義仲、巴丸、兼平、松林のお堂へと向かう。
為久、雪の中、三人が死ぬのを待つ。
為久、寒さに耐えきれず様子を見に行く。

巴丸　まだ生きてるよ。
為久　すまん。

巴丸　この鈴を鳴らすから、これが合図だ。
為久　ああ。

為久、震えながら待っている。
やがて、鈴が鳴る。
おわり。

あとがき

読んで頂いてありがとうございます。田坂です。
同じく平家物語を下敷きにした拙作に「関門オペラ」というのがありまして、こちらは「戯曲デジタルアーカイブ」というサイトから無料で読むことができます。木曾義仲一味の描き方が随分違いますので、もし興味があればこちらも読んでみて下さい。

役者も4人ですし、男女の別もありません。時間も多少削るなりすれば６０分以内でおさまると思いますので、是非高校の演劇部や、専門学校などで上演、あるいは練習用にでも使っていただけたら作者冥利につきます。内々の部内発表会くらいでしたら、連絡いただければ使用料はとりません。大会に出品する際は、ご相談ください。

あらゆる問い合わせは、非・売れ線系ビーナス公式サイト（www.hiurevi.com）の問い合わせフォームからどうぞ。